



## 本の紹介



### 不妊治療の経験をコミックにした『私、産めるのかな?』

小林裕美子著 (河出書房新社)

東京都北区在住の漫画家で、自らも不妊治療を経験した著者小林裕美子さん(41歳)は「子どもが欲しくて悩んでいる女性たちの気持ちや、男性や祖父母世代の人達にも分かってもらいたい」と言う。

漫画は、

- ♡流産を繰り返して治療をあきらめた美咲
- ♡未婚で妊娠、出産に現実味はないが、卵子の凍結を考える柊子
- ♡子宮を摘出し、特別養子縁組で子どもを迎えた葉子
- ♡体外受精をするか悩む明見美

の4人の物語。街中で子どもを見たときの複雑な気持ち、親戚の一言に傷つく様子、治療途中の揺れる気持ちが描かれている。

筆者の小林さんは27歳で結婚。なかなか妊娠せず、病院で検査したが原因は分からずじまいだった。30代半ばで体外受精を検討したが、費用や時間、精神的なダメージなどを考え踏み切れなかった。街中で子連れの家族を見ると嫉妬が渦巻き、自分の感情に驚いたり、「子どもがいると楽しいよ」と言われても、逆に「子どもがいたら大変だから2人もいいじゃない」と言われても、どちらも寂しい気持ちになった。

そんな時漫画の企画が進み、今まで人に言えなかった自分の気持ちを見つめられたという。いろいろな生き方があっていいんじゃないか…、漫画にはそんな思いを込めている。

(毎日新聞2015年5月29日より)

### 『朝が来る』 辻村深月著 (文芸春秋)

長く不妊治療をしても子どもが授からず、特別養子縁組を選んだ40歳女性。望まぬ妊娠をして子どもを手放さざるを得なかった少女。出産をめぐる両者の葛藤を描き、家族のあり方を問う重たい長編小説に、直木賞作家の辻村深月さんが挑んだ。

4年に及ぶ不妊治療の末に出産をあきらめた佐都子が主人公。特別養子縁組で授かった男の子を朝斗と名付け、夫と3人穏やかな日々を送っている。

ある日、朝斗の産みの母、片倉ひかりを名乗る女性が現れ「子どもを返して欲しい」と訴える。本書の後半はもう一方の主人公であるひかりの物語になる。幼いながらも自分の身体に宿った小さな命と真剣に向き合うひかり。しかし、妊娠、出産によって家族からも孤立し、追いやられるように転落していく痛ましい姿が描かれる。それでも温かな手が彼女に差し伸べられる。

子どもを持つこと、持たないこと、持てないこと。その複雑さに私達はどう向き合うべきか、本書は問いかける。「その人達の苦しみを知ること、少しでも生きやすい社会になって欲しい」と作者の辻村深月さんは言う。

辻村深月さん 1980年山梨県笛吹市出身

「鍵のない夢を見る」で直木賞。「島はぼくらと」「ハケンアニメ!」「ツナグ」「太陽の坐る場所」など多数  
(山梨日日新聞2015年6月21日より)